

研究

『幼稚園』の原著者

ディーター・レドナック(史学博士)



ベルタ・ロンゲのルーツをたどる 3

ベルタの波乱の後半生

翻訳／ベルガー有希子(公立幼稚園教諭)
解説・写真提供／大戸美也子(幼児教育史研究者)

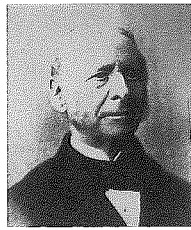
1 最初の結婚

「杖のマイヤー氏」は、娘に対していつも甘く、彼女たちの願いはすべてかなえてきた。しかし、娘たちの教育に関しては、学問をさせようとか、職業学校へ通わせようとはしなかった。当時の上流階級の女兒たちは、音楽や文学の教養、そして、愛らしく振る舞うことを義務づけた「ブルジョアの教育プログラム」に満足しなければならなかった。つまりは、将来の夫となる男性に良いパートナーとして譲り渡すことができるための教育であつたのである。また、娘の結婚相手を父親が決めることも少なくなかつた。杖のマイヤー氏

の娘たちも例外ではなかつた。おそらく父親の一番のお気に入り娘であつたベルタ(一八一八—一八六三)は、十六歳で父親の勧めで結婚することになった。結婚相手は、ハノーファー王妃のケンブリッジ公爵夫人の私設秘書をしていたフリードリッヒ・トラウン(以下、トラウン氏と表記)という優秀な男性であつた。トラウン氏は博学で見栄えが良い上、ハノーファー宮殿で洗練された立ち居振る舞いを身につけており、愚直な義父には感嘆すべき人物であつた。ベルタは父の望みを拒否することもできず、十四歳も年上の男性と結婚したのである。

ベルタの新婚生活はハノーファーで始まつたが、一

年もたためうちに二人はハンブルグへ戻ってきた。マイヤー氏が、順調に業績を伸ばしている自社の「参与」として、義理の息子トラウン氏に経営参加を求めたからである。トラウン氏は堪能な語学力を生かして、会社の渉外活動を一手に引き受けることになった。さらにマイヤー氏は自分の長男ハインリッヒ・アドルフに對して、トラウン氏の言動を見習うように助言した。トラウン氏は、マイヤー氏にはない博識と社交場の礼儀作法を身につけていたからである。



▲フリードリッヒ・トラウン氏

最初の数年間、ベルタはトラウン氏の理想通りの良き妻として、夫の言いつけを守り、一八四八年までに女兒二人と男兒四人の子どもをもうけた。マイヤー氏は、彼の所有するエルベ川に近いロートテンブルグスオルトの住居をトラウン一家に貸し与え、週末にはこの館は、増え続けるマイヤー一族を集めて一家の憩いの場となった。

2 ヨハネス・ロンゲとの出会い

ベルタの同世代の友人にエミリエ・ブステンフェル

ドがいた。彼女の夫はマイヤー家とトラウン家の常連客の一人で、彼らは定期的に集まってはハンブルグの政治や経済の問題について意見交換をしてきた。ベルタとエミリエは、この夕べに同席はしていたが、彼女らの意見に耳を傾けるものではなく、ただ会合の準備にただけだった。やがて二人は女性の伝統的な役割に不満を持つようになり、自分で何かをしたいし、自分の意見に耳を傾けてほしいと思うようになった。一歳年長のエミリエは、ベルタよりも政治的関心が強く、アマリエ・シーベキング夫人の設立した「貧困者と病人のための女性の会」の活動に参加していた。しかし、その会の差別意識や厳しい従順さを求めるあり方に違和感を覚え、やがてリベラルな方向を模索するようになっていった。

一八四四年当時、トリアアではアーノルディ司教が、市の保管する『聖なるイエスの石』を崇拜するよう呼びかけ、その石が免罪の証しとなると公言した。これを聞いたプレスラウの教会を破門されたばかりのヨハネス・ロンゲ神父（以下、ロンゲと表記）は、非常に

心を痛めた。そして、この一連の騒動に対して「偽りの神の祝福であり、信心を逆手に取った茶番である」と断ずる質問状を公開したのである。

「カトリック教徒、プロテスタント教徒にかかわらず、階級による専制を阻止しよう！ ドイツ国民よ、今、免罪符販売を行っているのはトリアだけでありません！ 至る所で、『お数珠』だの『ミサの執行』の名目で免罪集金が行われているのです！」

この質問状は民衆から強い支持を受け、ローマへの挑戦状あるいは宗教と政治上の抗議行動とみなされて、瞬く間にドイツ全土で多数の支持団体が結成され（一八四五年までに一七三団体）、「ドイツカトリック」と名乗った。

ロンゲは予想外の成功を収めて、「新ドイツナシヨナル教会」を広めるための全国的な講演旅行を展開し、後には『十九世紀の宗教改革者』と呼ばれるまでになった。これまでの宗教の形式を根本的に見直し、ま



▲ヨハネス・ロンゲ氏

た男女が同等の投票権を持つようにした。

ロンゲが講演旅行でハンブルグを訪れることになり、講演会の支援者を募るニュースが伝わると、そのニュースはたちまちリベラルな実業家マイヤー氏の耳に入り、彼は支援を申し出た。マイヤー氏の肝いりでハンザ同盟市のコンサートホールを借りることができ、その後、ハンブルグ市にも新しいドイツカトリックグループが結成された。ベルタとエミリエは、ロンゲの発する福音を喜んで受け入れ、ことに聖職者自らが男女平等を訴えることに心から共鳴した。

一八四六年秋、ハンブルグにドイツカトリック会が結成されると、十二月にベルタは知り合いの婦人三十人を招いて「ドイツカトリック運動を支援する婦人団体」を立ち上げた。そして、この婦人団体を中心にバザーや慈善の催しを行い、まとまった資金を作って、新しいカトリック会に神父一人を招き、礼拝や会合のための部屋を用意した。さらにこの婦人団体は、ドイツカトリック会への資金援助だけではなく、この会が宗教団体として公認され、カトリック会で執り行う結婚式や洗礼式なども行えるようにしようとした。しか

大戸美也子（おおとみやこ）
長年、保育者養成・現任保育者の再教育に従事。
近年は、幼稚園教育導入に関する日英米の比較研究を展開。

し、市参事会や市民の中には慎重な審査を求める声もあり、公認されたのは一年半後の一八四八年三月のことである。ドイツ三月革命が両者の決断に影響を与えたものと思われる。

ドイツカトリック会と他の宗教団体は法的に同等に扱われるようになったので、婦人団体の当初の目標は達成されたのであるが、この婦人団体は新たに会員の意識や精神教育の向上をも目指すようになった。集会では、宗教や政治の議題だけではなく、女性の社会参加についても話し合われ、ドイツカトリック会や自由思想の仲間から講師を招いた。時にはベルタの友人であるエミリエ・ブステンフェルドも講演に立った。ドイツカトリック会と自由思想家たちとは、立場に違いはあったが、女性の社会的制約による知識不足を改善しようとする点では意見が一致していたのである。

3 女子大学設立運動の推進

ベルタと姉のアマリエは、幼い時からユダヤ人に友好的な家庭環境で育った。マイヤー家はこれまでユダヤ人と誤解されてきたが、教会に残る記録をたどれば、

マイヤー家は間違いなくプロテスタントに所属する。それほど、ユダヤ人との交流が多かったということであろう。

ベルタの立ち上げた「ドイツカトリック運動を支援する婦人団体」という名称は、明らかにユダヤ教の女性たちの入会を妨げるものであったので、一八四八年四月、『ソーシャル協会』という宗派を超えた福祉団体を新たに立ち上げたことについては、グロレ氏が本連載1で詳述している(本誌夏号参照)。また、このソーシャル協会の活動目標を幼稚園の創設としながらも、会員の間で活動目標をめぐる意見が分かれたことについても触れているので、ここではベルタが加担した女子大学設立運動について若干の補足をするとどめたい。

ドイツカトリックの推進者ロンゲは、プレスラウの神父時代にすでに女子の教育機関の設立構想を練っていた。ところが、これを具体化するだけの財源がなかった。ロンゲの計画を知ったベルタは、女子教育機関計画はシュレジア地方よりはハンザ都市ハンブルグで実現するほうがはるかによいとロンゲを説得した。そし

て、チューリッヒで学校経営をしていたF. フレーベルの甥、カール・フレーベルの助言を得て、ベルタは友人のエミリア・ブステンフェルドと共に女子大学設立のために奔走し、一八五〇年一月に開校にこぎつけた。

この学校は、大学とはいっても女性と女子学生に基本的な教養を与えるにとどまるものであった。当時の学校教育は宗教色が強かったが、この「大学」は、学費を納めることができるか、奨学金を受けられることのできるすべての女性に門戸を開いたところに特色がある。

開講科目は、「哲学」「教育学」「フランス語」「英語」「文学」「歴史」「地理学」「化学」「植物学」「物理学」であり、「教育学」が最重要科目であった。また百名の学生は、ハンブルグに新設された幼稚園での実習も課せられた。教育学者のアントレ・レー^{注2}やアドルフ・デイスター^{注3}等が講師として招かれ、カール・フレーベルが学長に就任し、ベルタとエミリアがその運営にあたった。

大学付設の寮には十名の学生が入寮していたが、そのほとんどが大学設立者の関係者で占められ、その一

人に十七歳のベルタの妹マルガレーテがいた。学生募集は、主として口コミで、ドイツカトリック会や自由主義思想家などの知り合いを通して希望者を募った。また、大学運営の経費は、学費だけでは賅うことができなかったため、「学債」を発行して補った。^{注4}しかし、これに関心を持つ人たちが少なかったため、実質的に「学債」を購入したのは、トラウン家とマイヤー家、そしてブステンフェルド家の三家であった。

4 ロンゲの国外逃亡とトラウン一家への波及

ロンゲは絶大の人気を博していたので、一八四八年にはフランクフルト国民会議の議員に選出された。しかし、ドイツカトリック会代表のロバート・ブルムが銃殺され、三月革命の敗色が濃くなってきた。そこでロンゲは「すべての独裁者に抵抗して武器を取ろう」というプロイセン王あての檄文を公表したことから、彼は一転して「指名手配」の身に転じ、一八四九年八月には国外へ逃亡したのだった。

ベルタの夫トラウン氏は、ドイツカトリック会の考え方は「まともな政策」として、これに投資するつも

りで資金援助を続けてきた。しかしその一方で、ロンゲが次第に政治化し当初の目的から離れつつあることに、一抹の不安を感じていた。また、元聖職者のロンゲが女性に人気のあることも十分承知していたが、まさかそのことが自分に及ぶとは思っても寄らなかつた。

妻のベルタはロンゲの影響を強く受け、自分から離れていくことを引き止めることが次第に難しくなつていった。妻はすっかり変わつてしまい、自分の考えを堂々と夫に向かつて述べ、年上の夫に従順ではなくなつたのである。それでもトラウン氏は、ベルタのために、彼女の大きな計画を実現するために資金援助を惜しまなかつた。

大学設立に献身してきたベルタであつたが、大学開設直後の一八五〇年四月に、忽然とハンブルグから姿を消して友人たちを驚かせた。事情を知る数少ない人物である姉のエミリアは、「もうあなたのもとへは帰りません。私の視野は広がり、真の信仰生活や祝福された生活は、真実の愛の追求の中にこそある、と確信するに至りました……」と記したベルタの手紙を届けるために、ライプツヒの見本市に出張中のトラウン氏

を訪ねた。

最も簡単な解決策は、「離婚」であつた。しかし、一八五〇年の法律では、双方の合意による離婚は法的に認められなかつたので、一方の責任を証明する必要があつた。不倫や配偶者のもとを一方的に去ることは離婚の理由にできたので、ベルタは離婚の責任を一身に背負うことにした。

自分が妻としての責任を放棄すれば世間の非難を浴びることは百も承知の上で、それでも彼女は自分の気持ちに正直であろうとした。トラウン氏は、抜き差しならぬ現実に向き合う羽目になつたが、ベルタ欠席のまま離婚協議に臨むだけの度量を持つていた。ベルタが一步踏み出したのは、単に身持ちが悪いということではなく、時代が生み出した狂信的な考えによるものであり、その考えは政治的なものか宗教的なものかの判断さえつきかねるものであつた。残念ながらトラウン氏は、ハンブルグにドイツカトリック会が結成され、妻の入会を許したことで、離婚に至る事態を招いたと言えよう。

離婚の知らせを受けたロンゲは、指名手配中の身な

がらベルタを迎えにオランダへ向かった。もともと精神的に不安定なところのあるベルタは、ハンブルグからの逃亡中に極度のノイローゼに陥ったが、オランダで回復した。

一八五〇年十一月末、ハンブルグ裁判所で、トラウン氏とベルタの離婚は成立し、六人の子どもたちのうち、娘アガータとベルタ、そして末っ子の息子マックスは母親と一緒に暮らすことになり、あとの三人はハンブルグの父親のもとに残ることになった。正式な離婚の成立する一か月前の一八五〇年十月三十一日、ベルタはロンゲと共にロンドンへ渡った。この地で新しい宗教を広め、それを全世界に紹介しようという理想を抱いて。

注
1 ヨハネス・ロンゲ（一八三二—一八八七）は、シユレジア（現ポーランド領）の農家の八人兄弟の二男として誕生。プレスラウ大学で神学を専攻し助任司祭になったが（一八四〇年）、教会の形式的な儀礼を痛烈に批判し、破門（一八四四年）。その後、プレスラウ

を本拠として、人間の権利と寛容さを強調する「ドイツカトリック」運動をドイツ全土で展開するが、次第に政治色を強め、ロンドンに亡命（一八四九—一八六一年）。帰国後、フランクフルトで宗教改革連盟を立ち上げ、ウイーンで死去する。

2
アントレ・レー博士は、ハンブルグ市のユダヤ人を対象とする無償学校の校長を務めるなど、市の指導的な教育者。妻のヘンリエッテはハンブルグのソーシヤル協会のメンバーで、フレイベルを招聘しての幼稚園教員養成講座の実現に貢献した。

3
アドルフ・ディスターベーク博士は、子どもの好奇心や興味を教育的に豊かなものに高め、それによって自主独立の自立性を育もうとする自然主義の立場に立つ教育学者。フレイベルの友人であり盟友として、彼の仕事を支持し、広く紹介した。彼の娘ヘルミーネはフレイベルの教え子で、ベルリンを中心に活躍した。

4
大学の運営経費は、学生の授業料と寄宿生の高額の寮費だけでは賄い切れず、「学債」の購入や寄付に頼った。二年後、市からの寄付が停止すると、維持できなくなり閉校した。